

木の葉を照らす朝日

燐黒龍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

高校に受かった主人公は、その結果発表の帰りにダンプにはねられてしまう。次に目を開けた先は、忍者の世界であった。

彼は何を目的にこの世界を生きるのか。これはある男の生き様を刻んだ物語である

# 目次

第1話	開幕	1
第2話	目的	8
第3話	火影の火	20
第4話	バカな奴ら	31
第5話	出会い	43
第6話	歴史	54
第7話	秘密	69
第8話	事変	82
第9話	巨大な力を前に	90
第10話	抵抗	99



# 第1話 開幕

「うっしー合格だー!」

俺は無数の数字が羅列された掲示板の前でガッツポーズをした。今日は県内の公立高校入試の発表日である。この喧騒の中、周りを見渡せば友と抱き合う者、1人辛そうな表情の者、電話をかける者、泣いている者など、様々な者たちの感情がごちゃまぜになっっている様子が見て取れる。

かく言う俺もその1人であった。今回俺が受かった公立高校は、公立と言っても県内屈指の進学校である。小さい頃に父親が姿を消して以来母親に女手一つで育てられた俺は、この喜びを今何よりもここまで育ててくれた母の前で伝えたかった。

電話やメールじゃダメだ。帰って直接伝えよう。そう思った俺は、入り口近くに停めである自転車を入混みと他の自転車の中からなんとか探し出し、サドルに跨ってペダルを踏み込んだ。

正門から外に出れば、歩道は帰るものところから結果を見る者で埋め尽くされている。これじゃ歩道は無理だな。仕方ないので俺は車道側を走った。それにしてもこの道本当に狭いな。後ろから来る車にぶつかりそうだ。

そう思いながら斜め後ろから自分を追い越していく車を見てみると、不意に右腕が強烈な力で引つ張られた。そして俺はそのまま自転車のサドルから引きずり出され、体ごと前へと吹っ飛んでいった。

悲鳴、絶叫、クラクション。一瞬後にとてつもない痛み。俺は地面を数十メートル引きずられて初めて、車のサイドミラーに自分の服が引つかかかって引きずられているのだと分かった。

肉が削がれるような痛みにも、俺は声にならない悲鳴を上げると、サイドミラーに引つかかっていた服が外れて地面に放り出された。

「————つか————!!! 痛え!!!」

やっと声を上げられた。脚を見れば、あらゆる方向に曲がってしまったているのが見て取れた。そうすると自分の脳が事の重大さを認識したのか、更なる痛みが俺の脚を襲った。

「おいーさっさつさとそこから逃げろー!」

不意に聞こえたおっさんの声。その方向を見ると、その声の主であろうおっさんが、右を見ると合図を送っているのが分かった。そして右を見ると、迫り来るダンパー。

この時、時間が止まったように感じた。

完全にスローになった全ての動き。俺の脳はその中で高速の思考をする。

———  
なにか、なにか助かる方法は———

様々なこれまでにあつた映像が頭の中を駆け巡る。学校の体育の授業、友との喧嘩、母の笑顔———。

———  
この中で、なにか使えそうな経験は———

俺がこの映像が走馬灯だと気付いたのは、ダンプが目の前数センチまで迫ったときだった。

最初に見たのは、白い天井だった。見た事のない風景だ。俺は周りを確認しようと、首を回そうとする。なかなか思うように動いてくれない体に違和感を覚えつつも、そこが病院であることは一目で分かった。



ああ、俺は事故に遭ったんだったか。それで病院に運び込まれたのか。体があまり動かないのは事故の影響だろう。次第に状況が掴めてきた。しかしその時、横を向いている俺の頭の後ろから不意に声が上がった。

「あ！目を開いたつてばね！ほらミナト！ほらほら！」

「わかってる、ちゃんと見てたよクシナ」

聞こえてきたのは快活そうな女性の声と、優しそうな男性の声であった。そして俺の脇に二つの手が滑り込んだかと思うと、ひよいと優しく抱き抱えられた。

は？抱き抱えられる？俺はこの時、初めて自分の体が赤子のものであることに気がついた。

視界に入るのは鮮やかな赤髪をした女性。目鼻立ちはハッキリしていて美人に属するような顔である。

「アサヒ、パパだよー。わかる？」

声のする方に顔を向けると、こちらはキラキラと光る金髪の男性が柔らかな笑顔を見せていた。こちらは切れ長の目に鼻筋が通っていて、中性的なイケメンであった。

俺は確実に事故ったはずだ。正直今でも混乱しているが、どうやら俺は事故った結果

として夢を見てるか、考えにくいがいわゆる神様転生というやつをしてしまったのだから。

夢だったならば覚めるのを待てばいい。だが後者だった場合かなり面倒なことになった。神様転生は受験勉強中に気分転換でその類の二次創作とかをよく見ていたから知っている。でも元の世界に戻る系統の小説は見たことがない。

「あれー？ 反応がないってばね」

「生まれたばかりなんだしそんなもんだよ」

目の前の2人が俺の反応を見て話し始めた。

「でもなんか別のことを考えてるみたいなの……」

「クシナはアサヒが何を考えてるのかわかるのかい？」

「うん、母親だから」

そう言うのと金髪の男の方は顔を少し赤くしている。ノロケるのは大いに結構だが、少しマズイな。神様転生パターンだった場合感づかれるとかなり面倒なことになる。

どうしよう……これでも頭の回転と出来はかなり良い方だと自負している。夢には意識がハッキリしすぎているから、転生した可能性が高い。というか俺の勘がそう言っている。

しかしこの状況、この赤子の体では何もできないから、夢だと信じて待つしかない。

俺はそう自分に言い聞かせると、耐えがたい強烈な眠気が襲ってきて、眠りに落ちていくのだった。

## 第2話 目的

あれから3年が経ちました。

え？なんで時間が飛んでるっかって？赤子の時はほとんど寝てたからです。なにかしら考えようとしてもボーツとしていつの間にか寝てることが多くて、正直何やったかもあまり覚えてないです。

寝る子は育つ。というより子どもは寝る。ということなんでしょう。

まあそんなどうでもいいことは置いておくことにする。そのボーツとしてる中でも断片的な記憶はあるわけだ。まず、俺は間違いなく転生した。これは揺るぎない事実だ。こんな長い夢があるとは思えないし。

んで2つ目、俺はどうやら忍者の世界、NARUTOという漫画の世界に転生してしまったようだ。これは俺の住んでいる里にそびえ立つ顔岩を見て判断した。受験勉強前まではNARUTOは見ていた。そろそろ勉強に本腰入れようかなと思っていた夕

イミングで第一部が終わったので、それ以来は見えていない。

3つ目、俺の親は波風ミナトと波風クシナと言うらしい。2人とも恐ろしいが、特に父親の方は「木の葉の黄色い閃光」と呼ばれる程の凄腕の恐ろしい。でも波風という性のキャラクターは登場しなかったはずなので、原作とそこまで深く関わることはないであろう。

それと言い忘れていたが、俺の名は元の世界と同じ「アサヒ」であるらしい。

これからの目的であるが、元の世界に戻る方法を探そうと思う。あつちの世界からこつちの世界へと来れたのだから、逆もできるはずだ。できないと困る。

俺の母は子どもが全てみたいな人だったから、早く帰らないと心配しているはずだ。下手したら自殺しかねない。

で、元の世界に戻るために、いくらか決め事を作ろうと思う。

・ 感づかれぬ

これはかなり大事だ。もし転生者だと気づかれた場合、スパイと疑われて尋問や拷問、果ては研究のために人体実験されかねない。主に蛇っぽいオカマに。

・ 死なぬ

これも大事である。もしまた死んだ場合、他の世界に転生できるとはかぎらない。N

ARUTO原作ではほとんど人が死ぬ描写はなかったが、原作のカカシ曰く毎日のように相当数が死んでるらしい。

これらを踏まえて、まずはこの世界について知らなければならぬ。でも両親にいきなり「この世界ってなんなの？」とか言ったら頭おかしい子なので、とりあえずは図書館に行こうと思う。

「かーさん、ちよつと外に出てくるね」

「あら、どこへ行くの？」

キッチンで洗い物をしているクシナがこちらに振り向いた。俺を生んだのは19の時らしいが、この世界ではさして珍しいことでもないらしい。

「ちよつと遊びに行つてくるー！」

俺は嘘をついた。この歳で図書館に行くとか言ったら変に思われかねない。

「そう。日が暮れるまでには帰つてくるのよ」

「はーいー！」

そして俺が外に出ようとすると、ミナトが起きてくるのが見えた。クシナが寝起きの遅いミナトを軽く叱る声を聞きながら、俺は外へと駆け出していった。

「まったく……遅いわよミナト。いくら昨日まで長期の任務だからと言っても限度つてものが……」

「ごめん、だからごめんって」

ミナトはクシナの小言を聞きながら、パンを頬張っていた。今は11時なので、いわゆるブランチというものである。

「ところでアサヒはどこへ行ったんだい？」

「まーたそうやって話題をすげ替えようとする。外に遊びに行くって言ってたわ。たぶん違うけど」

「やっぱり何か違和感を感じるのかい？」

「ええ……あの子はあの歳ですごい賢いけど、どうも何かを隠してる感じがするのよね……」

クシナは顎の下に拳を当てて、目を細めた。

「そうか……もう少し気をつけて様子を見る必要があるかな」

「自分の子どもを疑うことなんてしたくないけど、何をしたいのかくらいは知りたいわ」  
「わかった。僕に任せて」

ミナトはそう言うと、クシナに向かって軽くウインクをした。

図書館に来た。木の葉隠れの里の中でも一番大きい図書館だ。ここで調べたいものが見つからないとなると、火影邸に忍び込まないといけないレベルになる。

「あら、アサヒくん。今日もお勉強？」

受付のお姉さんが話しかけてきた。俺は一人で外出を許可されるようになってから、この図書館に通い詰めているので、すべての受付の人に顔を覚えられている。



「うん。なんか術についての新しい本ある？」

「うふふ、実はね、今日は前から君が言つてた時空間忍術についての本を仕入れたのよ」  
「え!?!ほんと!?!それちよーだい」

「しーつ、図書館ではお静かに。ちよつと待つてね。取つてくるから」

そう言うとお姉さんは席から立つて関係者 only と書かれた扉の奥に消えていった。

それよりも俺は興奮していた。時空間忍術。これはこちらの空間から亜空間に干渉する忍術である。簡単に言えば、別々の世界を繋げる忍術だ。これは仮説でしかないが、この術を突き詰めれば元の世界に帰れる方法も見つかるかもしれない。

あと、忍術には魂に関するものもあるらしい。口寄せ・穢土転生は時空間忍術というよりこちらに分類されるようだ。木の葉にある古本屋で1冊だけ見つけたことがある。著者は二代目火影様だった。まあ簡単な理論しか書いてなくて、よっぽどの才能がある人じゃないと使い物にもならないような本であったが。魂に関する忍術はほとんどが禁術扱いされており、市場に出回ることはないらしい。あるとすれば火影邸の禁術の巻物が保管された部屋である。

魂に関する方もなんとかして知識を得ないと考えていると、お姉さんが本を持って出てきた。

「はい、お待たせ。借りる?」

「ううん。ここで読んでく。他に読みたい人もいるかもだし」

「そう、優しいのね」

そう言ってお姉さんは俺の赤く煌めく髪をぽふぽふと撫でた。今更であるが、俺は髪の色だけは母親譲りであり、毛質、容姿などは全て父親似である。まあ髪の色は多少独特だが、いわゆるジ○ニーズ系のイケメンになっていた。

俺は図書館の奥まで移動し、本棚と本棚の間にある1人用の椅子に座って本を開いた。

ふむ。時空間忍術には才能が必要であるらしい。簡単なものでは口寄せの術、これができるば少なくとも才能はあるってことか。でも中忍レベルの術か……まだ俺には早いか?一応チャクラ量を上げるために普段から身体を虐めて身体エネルギーと精神力を上げては上げているが、それでもまだ早いだらう。まずは下忍レベルの術をいくらか習得しなければな。

「ちよつといいっ?」

「うわあ!!!」

思わず大きな声を上げてしまった。周りの人からの視線が刺さる。

「ごめん、驚かせるつもりはなかったんだけど……」

申し訳なさそうに言う声の主を見ると、サラサラした黒髪に真つ黒な眼をした俺と同じくらいの歳の男の子が立っていた。

「ああ、いや、別に周りを気にしてなかった俺も悪いし……ところで何の用？」

そう聞くと、男の子は俺の隣に立てかけてある脚立を指差しながら言った。

「それ、貸してもらいたいんだけど」

「ああ、俺は使っていないからご自由にどうぞ」

そう言う男の子はありがとうと言って、脚立を本棚の前まで運んで本を探した。あの場所は手裏剣術の本がある。俺は少年の背中のうちわの紋様が刻まれているのを見て、うちは一族の者だと認識した。

確か原作じゃうちは一族はうちはサスケを残してうちはイタチが全滅させたんだっけか。イタチがサスケだけ残した理由もなんかワケわかんない理由だった覚えがある。

まあ今のところ関係はない。俺はなるべく原作に関わることなくこの世界を出て行くつもりなのだから。彼には悪いが俺は関わるつもりはない。そうして俺は手元の本に再び視線を落とした。

時空間忍術とは大きく分けて2つの種類がある。1つは自分以外のものを時空間から出し入れするもの。もう1つは自分自身を時空間から出し入れするものであるら

い。前者は才能さえあればある程度は使いこなせるようになるらしい。しかし後者になると術の会得難易度が跳ね上がり、自分自身の身体感覚、繊細なチャクラコントロールが必要となるらしい。

また、理論上は無理矢理こじ開けて直接2世界間の干渉を可能にする忍術もあるらしいが、これは血継限界レベルの術らしい。

なるほど……これからはチャクラコントロールの修行も必要だな。確か木登りの行と水面歩行の行がこれにあたるはずだ。

そして一通り本を読み終えると、本の裏表紙に見覚えのある顔があった。

著者：波風ミナト

ま　　じ　　か

どうやらこの世界での俺の父親は時空間忍術の使い手だったらしい。確かに思い返してみれば家で飛雷神とかなんとか言ってたな。帰ったらちよつと聞いてみるか。

そして本を閉じて顔を上げると、先ほどのうちはの子どもが立っていた。

「どうした？まだ何か用？」

「いや、それ君のお父さんの本でしょ？なんで直接お父さんに訊かないで本なんか読んでいるのかって」

「これが親父の本だって知らなかったんだよ。じゃ、もう俺行くから」

俺はポーカーフェイスな少年との会話を手短に済ませると、さつさと外へと出た。あれ、そういえばなんでアイツ俺の父親が波風ミナトだって知ってたんだ？

外に出ると、父さんがいた。

「あつ……父さん」

「アサヒ……母さんに嘘をついただろう」

俺はその言葉に大きく動揺した。感づかれてたか。ヤバイ。どうしよう。

「……」

「アサヒ、理由がどうあれ親に嘘をつくのはよくない。さあ、帰って母さんに謝ろう」

「……うん」

俺は小さく頷き、父の手を取り家に向かって歩き始めた。

「……」

「……」

俺は下を向きながら歩いているため、父さんの様子を見てとることができない。ただ、どうやって言い逃れしようかとばかり考えていた。

「……アサヒ」

「……はい」

「何か僕たちに隠してることがあるね？」

俺のしてたことはすべてお見通ししてことか。流石は木の葉の黄色い閃光の二つ名を持つだけはある。

「……」

「言いたくないんだつたら言わなくてもいい。君は賢い。何か考えがあつてのことなん

だろう。ただ、これだけは覚えておいてほしい」

そうして俺が顔を上げると、父さんは柔和な微笑みを顔に浮かべながら言った。「なにがあつても、父さんと母さんは君の味方だよ」

そう言うとうちの言葉に恥ずかしくなったのか、父さんははにかんだ。

俺はなんとなく嬉しくなつて、今度はまっすぐ前を向いて家へと向かった。

## 第3話 火影の火

図書館での出来事からだいたい半年が経った。あの後父さんと家に帰ってクシナに謝った。何のために図書館に行ったのかを聞かれて少しもってしまったが、そこは父さんが上手くごまかしてくれた。

そしてその後父さんに時空間忍術を覚えてくれと言ったが、やはりまだ早いらしい。とりあえず性質変化という、チャクラを火水土雷風のどれかに変化させる術を習得してからだと言われた。

と、いうことで俺は今演習場にいる。まずは準備運動として木登りの行を一番大きい木の頂上まで100往復、近くにある池で水面歩行の行を1時間ほどやる。準備運動から飛ばしすぎな気もするが、前に会った激マユ……じゃねえ、マイト・ガイさんはキ○ガイみたいな練習量だったので問題ない。たぶん。

あと気になったのは、そのキ○……じゃねえ、ガイさんが12、3歳くらいだったことだ。原作開始時から13年前に四代目火影が九尾を封印したこと、まだ四代目火影に代替わりしていないことを考えると、さつさと帰らないと九尾襲来という超死亡フラグイベントにぶち当たることになる。それは絶対に避けたい。



とりあえず準備運動を終え、性質変化の修行を始める。性質変化の知識は図書館で仕入れた。まずチャクラ感応紙を父さんに頼んで買ってもらい、チャクラを流すと紙が真つ二つに切れて燃えた。父さんによれば火と風の性質の才は同じくらいあるらしいが、修行で火事を起こしたくないので風の性質変化をやることにした。

まず第一段階、葉っぱをチャクラで真つ二つにする修行だが、これは一発でできた。なんかフン！って思いつきりチャクラ流したら結構簡単に切れたので楽勝だった。

次に第二段階、これはいくらか修行法があるらしい。俺はチャクラを流しやすい金属でできたクナイをいくつか買ってもらい、これで岩を貫く修行をすることにした。

最初から岩に投げたらあっさり弾き返されたので、まずは木を貫くことにした。初めのうちは木の半分くらいまでしか刺さらなかったが、一月程やると貫けるようになった。まあ普通の忍なら木を貫くだけで5年の修行が必要だと言うし、俺は才能がある方なのだろう。

で、今は岩に向かってクナイを投げているわけだが、まだ岩の半分くらいまでしか刺さらない。クナイには投げた後岩の中から取り出すために、ワイヤーをつけてある。

ひたすら岩に向かってクナイを投げる、投げる、投げる。100回ほど投げて岩がポロポロになってしまったので、別の岩に変えようと後ろを向くと

OKAMAがいた。

「うわあ!!!!!!」

俺は思わず尻餅をついてしまった。だって目の前にいるのラスボスですよ？そりゃ

そうなるわ。っていうか大蛇丸ってまだ里抜けしてなかったの？木の葉の額当てしてるし。

「そんなに驚くことないじゃない。私のこと嫌い？」

「は、は、はい！じゃない、いいえ！好き……じゃない、俺はホモじゃないし、ええと、伝説の三忍の大蛇丸様がこんなところにいるから驚いたんです！」

思わず声が上がする。しかし目の前の大蛇丸は不気味な笑みを崩すことなく言葉を続けた。

「まあそんなことはどうでもいいわ。あなた、すごい才能ね。あなたは小さい頃の私によく似ている……そう、その目とかね」

は？目？俺はそんな目つき悪くないわと言いついそうになったが、そんなことをしたら文字通り取って食われかねないのでやめた。

「ククク……でもね、その才能も寿命が終われば意味がなくなる。そうね……いや、この話はまたの機会にしましょう」

大蛇丸は最後まで不気味な笑みを浮かべたまま、突然話を打ち切って舜身の術で消えてしまった。

「ふう……なんだったんだ」

「アサヒか」

「おわあ!!!」

俺が一息つくくと、今度は背後から声がかかった。再度びつくりしその場から飛び退いて声の方向を見ると、三代目火影様がいた。

「なんだ……三代目様か」

「すまぬ、驚かせるつもりはなかったんじゃ。ところでお主、先ほどまで大蛇丸と話しておったようじゃが、あやつに変なことを言われなかったか？」

三代目様は穏やかな口調で謝ったが、大蛇丸の話になった途端にほんの少し顔つきが鋭くなった。なるほど、大蛇丸の調査をしているのか。大蛇丸は三代目様の気配を感じ取っていなくなったわけね。俺には全然気配が感じ取れなかったけど。

「えっと……大蛇丸様は俺のことを才能があるって褒めてくれました。でもその才能も死んだら意味がなくなるとかいうことも言っていましたけど……」

「ふむ、なるほど……」

とりあえず年相応の口調を演じながら、俺はありのままを三代目様に話した。

「そうか、ありがとう」

三代目様は俺の頭を撫でると、その場から去ろうとしたが、俺は一つ言い忘れたことを思い出して呼び止めた。

「あ、あと」

「なんじゃ？まだあるのか？」

「俺の目が自分の目と似ているって……」

そう言うのと三代目様は一瞬神妙な顔つきになり、すぐに柔和な微笑みを浮かべながらしゃがんで俺の肩に手を置いた。

「そうか……ところでお主は、火の意志を持つておるかの？」

「火の意志……？」

原作を読んでいるときに聞いたことはあるが、もういかんせん記憶が薄れてきているのでよく覚えていない。

「そうじゃ。火の意志というのは、里の皆を家族と思い、その家族のために里を守るという意志じゃ」

「うん……？なんかよく分かんない」

実際には意味は理解できたが、里の奴らを家族と思うということ自体が理解できなかったので、俺は聞き返した。

「ほつほつ、まあ今はよく分からないかもしれんが、お主も友を作ればいずれ理解できる。火の意志を持てば、お主はワシをも超える忍にだってなれるじゃろう」

そう言うのと、三代目様はくるりと背を向けて、ゆつくりと歩いていった。小さい背中

を見ると、おびただしい数の光が輝いているように見える。でもそれはたぶん気のせいだったと思う。

「ミナトよ、任務ご苦労であった」

三代目火影、ヒルゼンは火影執務室で任務を完了したミナトに労いの言葉をかけた。

「はい、ですが三代目、既に岩隠れの軍が火の国国境まで迫っており、大規模戦闘は避けられない状況となっております」

「ふむ、思ったよりも進軍が速いの。オオノキめ……岩隠れの中でも精鋭たちを送り込

んでおるな。ミナトよ、お主ならこの状況、どうする?」

三代目はミナトを試すような口調で問いかける。

「私なら、複数の大規模戦闘を避けるために少数精鋭でできた1小隊を敵の物資補給経路に送り込み、分断します」

「なるほどの、流石じゃな。その案、採用しよう。この任務にははたけカカシを部隊長とした、うちはオビト、のはらリンの三人スリーマンセル一組で行わせる」

それを聞いたミナトは、少し口調が強くなった。

「三代目!それは無理があります!はたけカカシは上忍になって1年経ちますが、うちはオビトとの関係は最悪です。私が部隊長になり、私が行くべきところにはたけカカシを送り込むべきです!」

「お主の案ではうまくいけば大規模戦闘を行う場所は半分になる。しかし、一ヶ所だけ人手が足りなくなる場所があるのじゃ。ここははたけカカシ1人を送り込むだけでは力不足、ここを任せられるのはお主しかおらん」

ミナトは広げられた地図の三代目の指差した箇所を見て唇を噛んだ。

「3人はお主の教え子、不安になる気持ちもわかる。しかしミナトよ、今は戦争中じゃ。若い者たちの可能性を信じることにしかワシらにはできません」

「……はい、了解いたしました」

そうやってミナトは執務室を出ようとした。

「待て、ミナト、まだ話がある」

火影室のドアを開けようとしていたミナトは振り返り、三代目に問いかけた。

「なんででしょう？」

「アサヒのことじゃ」

三代目がそう言うのと、ミナトの目の色が変わった。

「アサヒが何かしたんですか!？」

「まあ落ち着け、今のあやつは性質変化の修行をしているようじゃな」

「はい、半年ほど前にいきなり時空間忍術を教えてくださいと言われまして……簡単なチャクラコントロールを身につけさせるためにさせています。いかんせん戦争中でしたので全く見れてませんが……」

ミナトは三代目の前まで戻ってそう説明した。

「既にあやつこの性質変化は中忍レベル、チャクラコントロールも木登りの行に水面歩行の行を完璧にこなす程のレベルじゃ。あの歳にして恐ろしい才能よ」

それを聞いたミナトは少し頬が緩んだ。

「ありがとうございます」

しかしヒルゼンは逆に険しい顔つきになる。



「しかし大きすぎる才能は危険でもある。大蛇丸のようにな」

「アサヒが大蛇丸さんに似ていると。そう仰りたいんですか？」

ミナトの顔も険しくなった。

「いや、これは大蛇丸の言葉じゃ。最近の大蛇丸には不審な動きがあつての、今日後を尾けてみたらアサヒと話していたのじゃ」

ミナトは無言で次の言葉を促す。

「大蛇丸いわく、アサヒはあやつと似ておるらしい」

「三代目様もそう思うのですか？」

大蛇丸の妄言という可能性もあるため、ミナトは大蛇丸の師匠でもある三代目に意見を求めた。

「確かにアサヒの修行を少し見たが、何か野望でもあるのではないかという勢いじやつた。大蛇丸も小さい頃は才能に溢れ、野望に満ちた目をしておつた点では似てるかもしれない」

「ではうちの子も大蛇丸さんのようになってしまふと？」

ミナトは今や完全に子どもを心配する親の顔つきになっていた。

「いいや、そうは言っておらん。大蛇丸がおかしくなつてしまったのは両親の死後、ワシが正しい方向に導いてやれなかつたからじゃ。アサヒを正しい方向に導いてやれば、里

にとつてなくてはならない者になるじやろう」

「そうですか……」

「ミナトよ、アサヒを導いてやつてくれ。ワシの二の舞を決して踏むな。火影になるのならな」

三代目はそう言うのと、もうよいと言ってミナトを退がらせた。三代目の口に啜えているパイプから昇る煙が、輪を描いては消えていった。

## 第4話 バカな奴ら

鬱蒼と茂る森の中、2つの人影が木から木へと飛び移り、ある場所へと向かっていた。1人は大人、金の髪と「木の葉の黄色い閃光」という異名を持つ忍である。もう1人は赤く煌めく髪を持つが、まだ忍でもない只の子どもである。

「父さん、どこに向かっているの?」

俺は前に行く父親に声をかけた。今日の朝、父さんに「ついてきなさい」とだけ言われ外に出たが、全く行き先を知らないので正直困っていた。

「ん、そうだね……目的地には着いたよ」

父さんがそう言うと、薄暗い森から急に開けた草原に出た。草原とまばらにある岩以外に何も無い場所だ。

「(ハハ)は……?」

「周りをよく見てごらん」

俺が父さんの意図を掴めずに困惑していると、そう言われた。そして周りをよく見回すと、そこかしこに黒く変色したクナイや手裏剣、更には忍の死体が転がっていた。

「うわ……」

俺は思わず声を上げた。前世で読んだ漫画などで見る死体とは違う、そこには生々しい現実があった。腸は飛び出し、臭いはひどい。よく見れば死体には蟻やハエが群がっており、ところどころ白骨化しているところもある。

「ここはついこの前終わった戦争の大規模戦闘があった場所だよ」

父さんは遠くを見ながら呟いた。

「ここで倒れている人達は木の葉と岩の忍。僕たちはこれだけの犠牲を出してようやく戦争を終わらせることができた」

「バカだね」

「なんだって?」

思わず口をついて出た言葉に、父さんが声のトーンを低くして聞き返した。

「いま何て言ったんだい?」

父さんの顔を見るとすごい形相をしている。声にも今までに聞いたことのないような怒気が含まれている。

俺は一回言ってしまったことだし、誤魔化してもすぐに父さんに見破られるだろうと思ひ、正直に話した。

「バカだつて言ったんだよ。こんなに人を殺さない戦争をやめられない奴らがバカにしか思えない」

実際に前世で外国の戦争とかを写真で見せられても、バカだと思えることができなかつた。肌の色が違うからとか訳のわからない理由で差別し、殺す奴らはバカでしかない。それが俺の考えだった。

「確かにそうかもしれない」

父さんは言葉を絞り出すように言った。

「でも、だからこそ、僕たちはこの犠牲を忘れてはならない。次の世代にこの痛みを教えなければならぬ」

どこかで聞いたような言葉だ。ああ、そうだ。原爆だ。元の世界のテレビの中でよく爺さん婆さんが「戦争の痛みを知ってほしい」とか言ってた気がする。

「でも俺はそんな痛みわからない」

父さんがこちらを見た。薄々気づいていたが俺はどうやら思った事は口に出してしまいう性のようなのだ。

「そうか。確かに経験しない者たちに痛みを理解しろなんて言うのもナンセンスなのかもしれないね。だけどね、少なくとも君はこの痛みを未来の世代が経験するべきではないと思ってくれると思う」

俺は少し間を空けて、小さく頷いた。それを見た父さんも、満足そうに頷いた。

「んーじゃあ、次の目的地に行こうか。僕に触ってくれ」

そう言われたので俺が父さんに触れると、一瞬で周りの景色が変わった。開けた草原から鬱蒼と森が茂る峡谷へと視界が変わる様は、世界が変換されたようにも錯覚した。

「これが瞬身の術……」

「ちよつと違うな。これは飛雷神の術。君が知りたがっている時空間忍術の1つの完成型だよ」

なんと今のは時空間忍術だったらしい。時空間忍術とは2つの世界に干渉する忍術だと思っていたが、どうやらそれだけでもないらしい。いや、それは結論を出すのが早すぎるか？とりあえず帰ったら考察しないと。

思考の海に沈んでいると、父さんはいつの間にか少し離れた岩場に移動していて、何やら手を合わせていた。

「これは？」

俺は父さんの横まで跳び移って訊いた。どうやら見たところ誰かの墓のようである。父さんは合わせた手を降ろし、ゆっくりと目を開けて答えた。

「この墓は僕の教え子の墓だよ。先の大戦で命を落としました」

「……うちはオビトさんのこと？」

父さんは驚いたように眼を見開いた。

「彼を知っているのかい？」

「うん。いつも母さんが話してたよ、『あの子はまっすぐなところがいい』って」

「そうか……母さんもオビトの訃報を聞いたときは痛く落ちこんでいたよ。でも……」  
「でも？」

「ここで『でも』という言葉は予想していなかった。俺は父さんを見上げながら首を傾げた。」

「彼の意志は、まだ生きてる」

「？」

父さんの言葉の真意を掴みかねた俺はさらに首を傾げることになった。でも父さんは満足したような顔をして、その会話を切ってしまった。

「父さん」

「ん？なんだい？」

「言わなきゃならないことがある。」

「さつきは戦争する奴らがバカだとか言ってごめんなさい」

俺は父さんに深く頭を下げた。さつきは勢いでそんなことを言ってしまったが、今思えば明らかな浅慮であった。教え子を失ったという気持ちを考えればあの顔にも説明がつくし、とても申し訳ない気持ちになった。

「いや……いいよ。彼は戦争の被害者だ。大人のくだらない諍いに巻き込まれてしまっ

た1人の被害者だよ。君の言ってることは正しい。戦争なんてバカバカしい理由でしかやってない。でも……だからこそ、未来の子ども達のために僕は戦争のない世界を作りたい」

「でも、そんなの1人でできるわけないよ」

「うん。わかってるよ。なにも1人でやってやるなんて言ってる。足りない分の力は皆に借りるさ」

「でも、それでも足りなかったら?」

しつこい質問かもしれないが、俺は問うた。

「そのときは、君にこの夢を託すかな」

父さんはニコツとはにかんだ。それを見た俺は呆気にとられて少しフリーズしてしまった。俺に託すって言ったって、俺は受け継ぐなんて一言も言ってない。はつきり言ってるこの世界とは帰還方法がわかった時点でおさらばする予定だから余計な死亡フラグイベントに巻き込まないでほしい。

「じゃあ、帰ろうか。今日の夕ごはんは最近開いた一楽っていうラーメン屋さんにもで行こう」

父さんの言葉を聞いて、俺は怪訝に思った。

「あれ?父さんって母さんの手料理が一番好きなんじゃないの?」



それを聞いた父さんは、声を上げて笑った。

「確かにそうだけど、たまには母さんの好物も食べさせてあげないとね」

そうか、クシナの好物はラーメンだったのか、全然知らなかった。とりあえず覚えておこう。

「じゃあ行くよ」

そう言って父さんは俺の肩に手を触れた。

「へいーらっしやい！おっ……こりやあ大変なお客さんが来たな」

あの後父さんの飛雷神の術で一瞬で木の葉に帰った俺たちは、クシナと合流して一楽というラーメン屋さんに来ていた。

「ははは……大変って、ただの木の葉の忍ですよ」

初老の男の言葉に父さんは苦笑しながら返す。

「なに言ってるんだい！四代目火影が開店直後の店に来てくれるなんて、これほど光栄なことはないさ」

……は？四代目火影だと？

「まだ決まってるじゃないですよ、次の任務が完遂できれば候補に上がれるというだけの話です。それに他にも優秀な候補はいるし……」

「大蛇丸さんのことかい？あの方はどうも不気味でな……俺はアンタが火影になった方が安心だけどな」

父さんはその言葉に苦笑を返すことしかできなかった。

それよりも四代目火影ってなんだよ！原作じゃ大蛇丸は火影になってないから父さんが火影になるのほぼ確定じゃねえか！うわ……それじゃあ九尾イベントに否が応でも巻き込まれるんじゃないやねえか？俺……それで父さんは、もしかしたら母さんも死ぬ。

父さんと母さんが……死ぬ。

その言葉はなぜか俺の頭の中に反響した。別に俺はこの人たちとは関係ない。元の世界に帰るんだったら完全に縁を切らなければならぬ人達だ。死ぬのなら好都合、後腐れなくこの世界ともおさらばできるってもんだ。

「どうしたの？アサヒ、食欲ない？」

クシナが心配そうな顔をして俯いていた俺の顔を覗き込んできた。俺はその瞳を見て心の中を見透かされた気がして、内心焦りながら無邪気な笑顔を作った。

「大丈夫だよ！さあ、早く頼んで食べようよ！俺すごいお腹ペコペコだよ！」

「おっ！元気がいいねえ！さあ、何を頼むかい？ラーメン、つけ麺、酒のつまみまで全部揃えてあるぜ！」

初老の男はハキハキと快活な口調で喋った。

「じゃあ僕は豚骨ラーメンと焼酎とつまみはお任せで」

「私は……うーん、私も豚骨ラーメンで！」

「僕はつけ麺の並盛りで」

3人でそれぞれの注文をすると、店主は「豚骨ラーメン二丁、つけ麺一丁に焼酎とつまみね！」と答えると後ろを向いて麺を茹で始めた。

「あなた、つけ麺が好きなの？」

「おうわあ!!!」

突然背後からかけられた声に俺はひっくり返りそうになりながらなんとかこらえた。

「こらー！アヤメ！お客さんの邪魔しちやダメだろうが！」

店主は後ろに振り返って怒声をあげた。

「いいですよ、僕たちは問題ありません」

父さんは笑いながら店主をなだめた。店主は「そうかい？じゃあすまないが相手してやってくれ」と言つて、再び麺を茹で始めた。

「あら、かわいらしい娘さんね。何歳？」

クシナがアヤメと呼ばれた娘に微笑みながら問いかける。

「よんさい」

アヤメは手で4を作りながら答えた。

「アサヒと同じ年じゃない、この子、友達少ないみたいだから遊んであげてね」

クシナは相変わらず微笑みながら俺の頭をくしゃくしゃと撫でて言った。

「やめてよ母さん、俺は波風アサヒ、よろしくね」

俺は笑顔を見せながら自己紹介すると、アヤメは真っ赤になって急に歯切れが悪くなった。

「あの……つけ麺、好きなの？」

アヤメは最初に訊いた質問を繰り返した。

「うん、ラーメンよりもつけ麺の方が好きかな」

俺がそう言うのと、アヤメは「そう」とだけ言っただけ顔を真っ赤にしたまま走っていつてしまった。

「残念だったね、アサヒ。逃げられちゃったよ」

父さんは軽く笑いながら俺を励ますように背中を叩いてきた。俺は逃げられたことが少しショックだったので、素直にシユンとした態度を体で表してみた。それが父さんのツボにハマったのか、父さんはしばらく笑い続けてた。

俺は気づいていなかった。このとき母さんがすごい怪訝な顔をしていたのを。

## 第5話 出会い

一楽の件から2ヶ月ほど経過した。あれから2回ほどあのラーメン屋には行つてゐるのだが、アヤメが出てくることはなかった。最近になつて隠れている人の気配が感じ取れるようになったので、物陰に隠れてこちらを見ていることだけはわかつたのだが。まあ悲しいですよ、ハイ、ここまで避けられるとは思つてませんでした。まあ一楽はラーメン（父さんのを一口もらつた）もつけ麺も美味いから定期的に来ようとは思つていないけど。

とりあえず風の性質変化のコツをアスマさんからなんとか聞き出したので、今は演習場に来ています。あとは風のチャクラを忍術として完成させるだけだからね。

まずは手っ取り早く、風の性質変化の入門編である風遁・大突破をやってみるか。

俺は大きく息を吸い込みながら印を組み、チャクラを練り上げ思いつき風を口から吹き出した。

あ、

ヤ  
バ  
イ

俺が起こした風は木々を木つ端微塵にし、岩をキレイにくり抜くように削り、数百メートル先まで全てを吹っ飛ばした。

おい！こんなになるなんて聞いてねえぞ！本で読んだ限りじゃ風遁・大突破の効力は主として相手の動きの妨害、高度な術者に限って副次的に刃のような攻撃ができるっただけだったはずだぞ！

「くっそ……どうすんだよこれ……」

俺は舌打ちをしながら呟いた。この後は父さんの四代目火影就任の式典に出席しなきゃいけないってのに……マジ笑えねえ。

「これ、君がやったの？」

後ろから声をかけられた。つーか俺背後から突然声かけられること多くね？もう驚くこともなくなったわ。まあ気配が分かっていたっていうのもあるけど。



「ああ、そうだよ。なんかミスったみたい」

そう言いながら俺が後ろを向くと、2人の少年がいた。1人は俺よりも少し年上っぽい天パ×黒目の奴。もう1人はいつか図書館で会った少年だった。

「風遁・大突破をこれほどの規模で起こすなんて、流星は四代目火影のご子息だな」

天パの方が俺の術の痕を見て言った。

「やつぱりあれは風遁・大突破だったのか？本で見た効力と大分違うんだけど」

「ああ、俺も驚いたけど、あれは確かに風遁・大突破だ。ここまでの規模になったのはチャクラの量……というよりも風のチャクラの質をかなり高めた結果だろう」

「シスイさん……まさか」

図書館で会った少年が天パの方に声をかけた。そうか、天パの方はシスイと言うのか。どつかで聞いたことある気がするけど……。

「ああ、この間な、開眼したんだ」

そう言うとシスイの目が3つの勾玉紋様に地の色が赤いものへと変化した。写輪眼ってことはこいつもうちは一族か。

「やつぱりすごい、シスイさんは」

「俺なんてまだまださ。それに実際元々持つて生まれた才能ならお前の方が上だと思うぞ」

完全に蚊帳の外になってしまった俺はどうすればいいのか分からず困ってしまった。それに気づいたシスイは俺に自己紹介してきた。

「ああ、ごめんごめん。俺はうちはシスイだ。んでこつちが……」

図書館で会った少年も、シスイに肩に手を置かれて気づき、自己紹介した。  
「俺はうちはイタチ。よろしく」

なん……だと……

S級犯罪者キターーーーーー！！！！！！  
僕の人生詰みゲーワロタ。

「どうした？」

俺が黙り込んでしまったのを不審に思ったシスイが聞いてきた。あれ？そういえば原作ではシスイってイタチに殺されてたよな？笑えねー

「いや、なんでもない。俺は波風アサヒ。よろしく」

「わざわざ自己紹介しなくても【木の葉の黄色い閃光】の息子の名前くらい誰でも知ってるよ」

シスイは笑いながら答えた。ああ、こんないい人が10年後くらいには殺されるのかと思うと切なくなる。

「そういえばイタチとアサヒくんは同じ年だっけ？」

「ああ、そのはずだよシスイさん」

「だから『さん』を付けるのはやめてくれって……アサヒくん、できればコイツと友達になつてくれるとありがたい。どうもイタチは友達が少ないらしくてな」

シスイはイタチの頭をぼふぼふと叩きながら言う。あ、イタチがむくれてる。なんかおもしろえ。

俺が笑うと、イタチは更に不機嫌そうな顔になった。思つてたより表情豊かじゃねえか。というよりも、このイタチまだ闇堕ちしてないんじゃないか？ そういえば原作でもサスケが小さい頃はいいお兄さんだったよな。

「とりあえずよろしく、アサヒ」

イタチがムスツとしたまま手を差し出してきた。俺はイタチがまだ悪い奴ではないと認識し、笑いながらその手を握る。

「こちらこそよろしく、イタチ」

「はっはっ！ 仲良くしてくれよ。ところでアサヒくん、この後はお父さんの火影就任式典だろう？ この演習場は俺たちがやったことにしてあげるから、早く行つておいで」

「え?! 悪いですよ」

俺がシスイにそう言うと、イタチが口を開いた。

「火影就任式典の日にその火影の息子が問題を起こしたとなつては良くないだろう。その代わり……」

イタチは無表情のまま続けた。

「貸しーだ」

「そんなこと言ってるから友達できないんだろ」

シスイがイタチの頭を小突く。俺はまたおかしくなつて笑つた。

「わかつた！ありがとう！この借りはいつか返すよ、イタチ」

俺は小突かれてまたムスツとしたイタチと笑っているシスイに手を振りながら、走つてその場を後にした。

「父さん」

俺は金髪の男に声をかけた。その男の羽織には「四代目火影」と紅い文字で描かれている。

「なんだい？」

「もし未来に罪を犯すと分かっている奴がいたとしたら、父さんならどうする？」

俺は先ほど火影就任の式典を終えた父親に問いかけた。大して深い意味はない。ただ、気になったのだ、火影の答えが。

「どうしたんだい急に……そうだね、僕なら全力で止めるかな」

「それは殺すってこと？」

「いや、違うな。その方向に行かないように頑張るってことだよ」

「それでも止められなかったら？」

俺がしつこく訊くと、父さんは少し顔を引き締めた感じにして口を開いた。

「それでも僕は決して諦めないよ」

少しの静寂。そして父さんは頭をポリポリと書きながらはにかんだ。

「いやー、今読んでる小説の主人公のセリフを借りようと思ったんだけどね、ちよつと上手く決まらなかつたかな」

そう言いながら、父さんは椅子から立ち上がり、本棚から一冊の本を取り出した。その本の表紙には『ド根性忍伝』と書かれていた。

「この小説の主人公なんだけどね、頭もあまり良くないし忍者としての才能にも恵まれたわけじゃないんだけど、決して諦めないド根性で運命を切り開いていくっていう物語だよ。君も暇なときに一度読んでみるといい」

「へえ……わかつたよ」

「ところで君、今日演習場をめちやくちやにしただろう」

「うっ……」

突然の詰問に思わずどもってしまった。イタチの野郎、結局バラしたのか？

「今日うちは一族の少年2人が謝りに来たらしいから式典の後に見に行つたけど、あの演習場の荒れ方は風のチャクラのものだ。しかもかなり高練度のね。あのレベルの術だとアスマやカカシ、ダンゾウさまとか片手で数えられるくらいしか考えられない。でもその人達が子どもに罪をなすりつけるとも思えないから君だつてわかつたわけだ」

まあ確かにそうか。だつて聞いていた効果の数倍くらいのが出たからな。

「まあ君が罪をなすりつけるような子じゃないとは思うから向こうの好意でやってくれ

たんだらうけど、今度しつかりお礼をしておくことだね」

「はい……ごめんなさい」

俺は首を垂れた。するとガチャッと玄関が開く音がした。

「ただいまー！ミナト、アサヒ！来て！」

母さんの声だ。いつもよりどこか興奮の色を含んでいる。

「どうしたんだらう？アサヒ、一緒に来なさい」

そうして父さんと一緒に母さんのもとへ行くと、母さんはお腹に手を当てながら言った。

「ミナト……できたってばね！」

父さんはキョトンとしていたが、少しの間を置いてハツとしたように答えた。

「できたって……そういうこと？」

「うん！子どもができたってばね！」

「おお！2人目だ！やったねクシナ！」

歓喜する2人を見てみると、母さんが俺に声をかけてきた。

「アサヒも、お兄ちゃんになるから、よろしくだってばね！」

その瞬間俺は全てを悟った。ああ、子どもがもう1人できるのか。俺は兄になるのか、と。



「名前は どうするの？」

俺は2人に訊いた。すると父さんが答えた。

「いい案はあるんだけど、まだ男の子か女の子かもわかってないから、決められないかな」

「あ、そっか」

俺がそうだったと言うと、2人は笑った。俺もそれにつられて、笑ってしまった。

「じゃあ今日は僕が赤飯を作るよ。クシナはあまりムリをしないようにね」

俺はそう言って台所に向かう父さんを見送りながら、少しの不安をかかえて、これから生まれてくるであろう命に思いを馳せるのであった。

## 第6話 歴史

「よーし！行くか！」

「……ああ」

元気なさすぎワロタ。こんにちは、アサヒです。今日はイタチと一緒に里の外に出て火の国の散策をしようと思つてます。つーか向こうから誘つてきたのになんなんだこのローテンションは。そりやこの歳でここまでテンション低かったら友達もできないわな。

「……なんか言つたか？」

「いやーなにも！」

心読めるのかお前、いよいよチートだな。

とりあえずイタチは手付かずの遺跡みたいなものを回りたいらしい。どうせなら忍者じゃなくて歴史学者とかになつてくんねーかなー、そうしたらサスケもハッピーなのに。

「で、お前は遺跡に行つてなにをするのよ」

「……俺は戦争をとめたい」

「それが遺跡となんの関係があるのさ？」

「戦争を止めるには里とはなにか、忍者とはなにか、千手とはなにか、うちはとはなにかを知る必要がある。そしてそれを知るには歴史を知ることが必要不可欠だ」

「へえ……そういうもんかね」

「まあ見に行つて損はないはずだ。先人から学べることはたくさんある」

「つかコイツの口から戦争を止めたいとかいう言葉が出てくると思つてなかった。どこでダークサイドに落ちたんのお前は。」

「……この間、弟が生まれたんだ。俺はその子が幸せになるなら何でもするつもりだ」

「やっぱり心読めるんじゃないやねーかお前。つか九尾事件までもうほとんど時間なくね？ マズイっしょこれ。せめて九尾の居場所さえわかればなんとかなりそうなんだけどな……」

「……どうした？」

「黙り込んだ俺を見てイタチが話しかけてきた。未来を知っていることがバレちゃマズイので俺は急いで話を取り繕った。」

「いや、俺も弟がもうすぐ生まれるらしくてさ、兄貴になるってどんな感じなのかなーつて思っただけだよ」

「見ればわかるさ」

「は？」

イタチの答えともならない答えに俺は聞き返した。

「俺は弟を一目見た瞬間に、この子を死んでも守りたいと思った。理屈なんかじゃないんだ」

「へえ……」

俺は短い返事をした。本当にどこでダークサイドに墮ちたんだコイツは。なにかどうしようもない理由でもあったのか？だからって親を殺すかフツ。あー、頭がぐちゃぐちゃになつてきた。

「着いたぞ」

そうこうしている内に目的地に到着したようだ。イタチの声で顔を上げるとそこは洞窟だった。洞窟の入り口までまっすぐとした石畳の道があるが、ところどころ欠けたりしている。そしてその道の両脇にはなにかの祭りにでも使われていたのだろうか、大きな燭台が等間隔で並んでいた。

「すげえなこりゃ」

「中に入る」

そう言つてイタチはスタスタと中へと歩いて行つた。おい、誘つておいて俺を待つ気はねーのかよ。

洞窟の中は真つ暗になっていたので、イタチはロウソクをカバンから取り出すと簡単な印を結んで口から火を出しそれに火をつけた。

「便利だな、火遁」

「本来はこんな使い方はしないがな」

そう言うときまたスタスタと奥へ歩いて行つた。俺はそれに置いてかれないように急いで追う。

洞窟の中は真つ直ぐな道が続いており、足元も整備されていたのか真つ平らだった。そしてしばらく奥に進むと、ドーム状の大広間に出て、そこで行き止まりになっていた。

「行き止まりじゃん」

「目的のものはあつた。これだ」

そう言いながらイタチは大広間の中心にある岩に近づいた。

「なんじゃこりゃ」

「昔の人達が記した石碑だ。今日はこれを読みに来た」

「んで、これお前読めんの？」

というのも、石碑にはまるで訳のわからない記号が並んでいるだけであり、読めるような代物ではなかったのだ。

「確かにこのままじゃ読めないが、これにはある仕掛けがある」

「なんだ？もったいぶらずに教えろよ」

「今から説明する。まずこの大広間の天井に円を描くように燭台が並んでいるのはわかるな？」

そう言われてドーム状の天井を見上げると、確かに小さな燭台が等間隔で並んでいた。

「ああ、あれね」

「まずあの燭台全てに俺が火遁で火をつける。そしたらお前の風遁でその火を全て青くしてほしい」

「ああ、ガスバーナーの原理ね」

「なんだそれは」

やべ、この世界にはガスバーナーないんだっけ？コンロあるのにな。理科の実験とかどうすんだ。

「いや、なんでもない」

「まあいい、この石碑はその青い火の光で照らして初めて読めるようになる。だからお前には俺が読み終わるまで風遁で火を青く保ってもらいたい」

「……………」

ホンマにキレタ

「パシリじゃねーか!!!」

「まあそうなるな」

イタチは悪びれもせずと言った。てめーぶつとぼすぞマジで。

「身近な人で風遁を扱えるのはお前しかいなかった。頼む」

「………つたく、しよーがねーな、お前にはこの前の借りがあるしな。やってやるよ」

「感謝する」

そう言うといタチは印を組み始めた。つーかコイツの印速くね？ やつと目で追えるレベルなんだけど。

——火遁・鳳仙火の術！

イタチの口から複数の火の玉が飛び出し、ドーム状の天井にある12の燭台全てに命中して火が灯った。

「よし、俺の出番か」

俺はそう言いながら印を1つ1つ思い出すように結んだ。

——風遁・風玉ふうぎよくの術！

そう心の中で唱えながら俺は1つずつ風の弾丸を放った。そしてその弾丸が燭台に到達すると、燭台に灯っていた炎は鮮やかな青色になった。

「思いつきりチャクラ練り込んだけど、炎に酸素が供給されるのはせいぜい20秒だからな！ さつさと読めよ！」

俺はイタチに向かってそう叫んだが、当の本人は無言で石碑とにらめっこしている。そして10秒が経つか経たないかでこちらに振り向いた。

「解読完了だ。協力ありがとう」

俺はそのイタチの言葉を聞いてポカンとした顔になった。

「……どうした？」

「いや、お前、ちゃんと『ありがとう』って言えるんだな」

そう言うといタチは少しむくれた顔になった。

「当たり前だ。バカにするのも大概にしろ」

「はっは！ 悪い悪い」

俺はイタチのちよつと怒った顔がおかしくて笑った。当のイタチは不機嫌なままだ



が。

「ところでお前、あの石碑10秒くらいで読めたのか？」

「ああ、昔から速読と記憶力には自信がある」

へえ、なるほどね。それが印のスピードにも関係してるのかね。

「で？なんて書いてあつた？」

「内容はこうだ。『我、ここに記す。六つの道を修めける者は既に死せり。我、彼の者の弟子なり。彼の者死すとも彼の者の教えは死せず。彼の者の子二人、教えを改変せり。この御業は人を傷つけるものにあらず、人の心と心をつなぐものなり。我、汝にこの希望を託す』」

「は？全然わかんねーな」

俺は一応前世の古文の知識はある。でも六つの道を修めける者ってなんだよ。教えとか御業とか言われてもわかるわけねーだろ。

「おそらく『六つの道を修めける者』っていうのは六道仙人のことだ。お前も御伽噺とかで聞いたことあるだろう」

「御伽噺とか興味ないから知らん」

「ハア……御伽噺とかっていうのは昔から伝えられる物語のことだ。半分以上は嘘っぱちだが元は実話であることが多い。少しくらいは興味を持って」

「はいはい」

俺は元の世界に帰ることしか興味ないから適当に聞き流した。術さえ極められればその他はどうでもいい。

「で、内容を簡単に言う」と『六道仙人は既に死んだ。私は六道仙人の弟子である。六道仙人が死んでも彼の教えは死なない。しかし六道仙人の子ども2人は教えを変えてしまった。この教えは人を傷つけるためのものではない。人と人の心をつなぐものである。私はこれを読んでいるあなたに真実を皆に伝え直す希望を託そう』

ふと気づくと青かった炎は赤い色に戻っていた。

「ふーん、お前、その年で古文読めるのかよ。だいたいわかったけど、教えてなんんだ？」  
「おそらく忍術のことだな。忍術は元々忍宗という宗教のようなものだったと聞いたことがある」

「なるほどね」

「わかったなら帰るぞ。目的は済んだ」

イタチがそう言ううちちょうど燭台に灯っていた火も消えた。

「待て、何かおかしいぞ」

俺は違和感を感じ、イタチを制止した。

「なんだ？」

火がないので真つ暗であったが、イタチもすぐに臨戦態勢に入ったことが気配でわかった。

「俺たちが入ってきた方向と逆からの風を感じる」

「あつちか？」

そう言うといタチは自分で持つてきた燭台に火を灯し、俺の言った方向を照らした。

「……何もないが」

「おかしい、風が止まったぞ」

実際にイタチが照らした方向には何もなく、壁があるのみだった。そして照らすと同時に風も止まった。

「なるほどな」

イタチはそう言いながら燭台の火を消した。そうすると再び風が吹き始めた。

「風が吹いてるのはわかるが、正確な方向がわからないな。アサヒ、風の方向に案内してくれ」

「おっけー、こつちだ」

そう言いながら俺はイタチの手を引いた。そのまま風を感じる方向へ進むと、やはり壁があった。

「ここだけど、行き止まりだぜ？」

「いや、とりあえずその壁蹴ってみればわかる」

そう言われて俺は足の裏で壁を蹴飛ばした。すると壁がゆっくりと開き、地下に続く階段が現れた。

「うわ、なんだこりゃ」

「恐らくあの石碑はこれを隠すためのダミーだ。この先に更なる情報があると思っていだろう」

「降りんの？」

「無論」

おいおいマジか。こんな得体の知れないところに子供2人で入るのかよ。

しかし俺が躊躇している内にイタチは階段を降りていつてしまったので、俺も急いで追いかけた。

「おい待ててっ！」

しかし階段はすぐに終わり、行き止まりになった。

「おい、行き止まりじゃねえか」

「よく見ろ。これは……石像と絵画だ」

そうして壁だと思っていた場所を、岩を仰ぎ見ると、それは大きな女神像だった。その後ろには丸い大きな岩と2人の人が描かれた絵があった。

「なんだこれは……?」

「ここに来てさつきまでずっと落ち着いていたイタチが困惑の声を上げた。」

「なんだ? お前でもわからないのか?」

「俺が今まで聞いたどの話にも当てはまらない。強いて似てるものを挙げるなら六道仙人が作ったと言われる月の話くらいだが……」

「は? 月を作った? 人が? そんなの架空の話だろと思つたが、別に今はそんなことどうでもいいので言わなかつた。」

「具体的にどこらへんが違うのよ?」

「まず背中に波紋状のマークがあるこの人物は六道仙人だとしても、この隣にいる人物、これが誰なのか皆目見当がつかない。そしてもう一つ。この女神像だ。忍界の神話の時代に女神はいない」

「へえ……」

「実は俺はこういう謎の多いものが好きだったりする。前世でもツタンカーメンの謎とかなんとかいうテレビよく見てたし。」

「そっぴやさつきから気になってたんだけどさ」

「なんだ?」

「この絵の端にいる真つ黒な奴だれ?」

俺が指さす先には、一見するとただのシミにしか見えない、しかしよく見れば確かに意図的に描かれた黒い人型があった。

「なんだこれは……」

イタチはそれに近づき、その黒い人型の上を指で撫でた。

瞬間、地響きがあった。

「なんだ!?!地震か!?!」

俺は予想外の出来事に少し慌てる。

「マズイ……今すぐここから出るぞ!」

イタチは何かを察知したのか、普段出さないような焦った声で叫んだ。

「ふう、おいマジかよ」

俺は隣のイタチに言うでもなく呟いた。

「まさかあんな仕掛けがあるとは思わなかった。俺の不注意だ。すまなかった」  
イタチは俺に謝る。俺達の前には天井が完全に崩れ落ちて塞がった洞窟の跡があった。  
た。

「いや、普通わかんねーよ、まさか絵に触れたら天井が崩落する仕組みなんてな」

イタチと俺の見解では、あれは地震ではなく洞窟の仕掛けということになっていた。大体洞窟が崩れ落ちるほどの地震が起きたらもつと森の動物とか騒がしいはずだし。

「まあ、とにかく2人とも何ともなくてよかった。とりあえず今日はここで解散にしよう。それと……」

イタチは疲れた顔で話す。

「今日のこととは他言無用、オレ達の間での秘密にするぞ」

「は?..なんで?」

「遺跡を壊したと知られたら色々マズイだろう」

苦々しい顔をして言うイタチの言葉を聞いて、俺は笑った。



## 第7話 秘密

「……へ？今なんて言ったの……？」

俺は家で呆気にと取られていた。父さんは困ったように笑いながら先ほど言った言葉を繰り返した。

「だから、君の弟の名前は【ナルト】に決定したから」

流石に俺は焦った。まさかこの世界の主人公の兄になるなんて。あれ？でも俺の苗字は【波風】であって【うずまき】じゃないぞ。そうだ、俺が転生したから少しイレギュラーが起きてるのか。

「でも、どうして【ナルト】なんて名前に……」

俺は既に決められたであろう運命に少しでも抗おうとした。ナルトの名前が【ナルト】でなくなったとしても未来が変わるとは限らないのに、でもどうしても抗わずにはいられなかった。

「そうだ、君には由来を言ってなかったね」

父さんは後ろにあった本棚から本を取り出した。

「あ、それ……」

「ん、確か前に君にも紹介したよね。この「下根性忍伝」、実はナルトって名前はこの主人公の名前からもらってるんだ。あ、もちろん著者にも許可を取ってる」

父さんの目を見るともう何を言っても変わりそうになかった。そんなに気に入ったのか、その本の主人公が。

「その反応を見るに、どうやらまだ読んでないみたいだね。前にも言ったけど、この本は君にもぜひ読んでもらいたい。まあ強制はしないけどね」

父さんにしては珍しく強く勧めてきた。まあ今はそれよりもやりたいことがある。ナルトの兄になってしまおうというのならなおさらだ。俺は早くより強くならなければならぬ。そうしないと早々に死ぬ。

「ところで父さん、風の性質変化は大方できるようになったんだけど、次はどうするの？ やっぱり火の性質変化？」

「そろそろそう言う頃だと思ったよ。流星は僕と母さんの子だ」

父さんはそう言うって俺の頭にポンと掌を乗せた。俺は少し照れくさくなって、次の言葉をせかした。

「いいから、早く」

「まあまあ、そう焦らないで。今から君に習得してもらうのはこの術だ」

そう言うって父さんは俺の頭に置いていた手を離して掌を上に向けると、そこから球状

に渦巻くチャクラが出てきた。

……主人公の必殺技じゃねーか!!!!

正直もうドツキリはお腹いっぱいである。これ以上驚かされたら吐き気を催しそうだ。

「この術は『螺旋丸』と言ってね。この術には三つのポイントがあるんだけど、なんだと思おう？」

「回転と威力と……圧縮？」

「そう！よくわかったね！」

父さんは驚いたように声をあげた。まあ原作で少しカンニングしてるんだから当たり前なんだけど。

「チャクラを扱う上で大きく二種類に分かれるのが、この螺旋丸で習得してもらおう形態変化と君が習得した性質変化だ。その名の通り、性質変化はチャクラの性質自体を五つの自然現象の形に変化させる。形態変化はチャクラの形自体を色んなものに変えることだ」

「でもその術、かなり難しいよね？」

「まあね、習得難度は上から2番目のAっていったところかな。まあ君ならすぐできるとでしょ」

「なんだよその根拠のない自信……」

俺はため息を漏らした。

「自分の子どもとは信じるのが親ってものさ」

父さんは軽くウインクしながら答えた。それを見た俺はさらにため息を深くするの  
であった。

「あー、割れねーな」

俺は掌の上で水風船を転がしながら呟いた。最初の修行は原作通り、水風船を割るものだった。簡単にできると思ったが意外にチャクラを乱回転させるのが難しい。

「そーいやあのオッサン誰だったっけ？」

俺が家を出る時に入れ替わるように訪ねてきた白髪の大男のことを思い出しながら呟いた。なんか結構重要人物だった気がするんだけどな……本当に原作忘れてきてる。とりあえずここらへんで今覚えてる知識を書き出しておくか。

《1、アカデミーから下忍編》

たしかイルカだっけ？なんか先生がナルトを忍者として認めてくれたよな。敵キャラもいたような気がするけどアカデミー生だったナルトにやられるくらいだから心配しなくていいだろ。

《2、波の国編》

これはよく覚えてる。再不再と白だよな。再不再はホンマにヤバイって記憶がある。俺の覚えてる敵キャラの中では3本の指に入るか入らないかってレベル。

《3、中忍試験く木の葉崩し編》

たぶんここらへんは俺が関わる事は少ないだろ。だってナルトの試験だし。手を出したくたつて出せないはず。でも木の葉崩しはどうする？あれで確か三代目のじいさん死んじまつたよな。俺がオカマ丸と戦う？イヤイヤヤムリだろ。とりあえず保留。

#### 《4、綱手搜索編》

えーと、これはナルトがエロ仙人と旅に……あ！エロ仙人！あのオッサンエロ仙人かよ！なるへそ。まあこれもあんま気にしないでいいかね。

#### 《5、サスケ奪還編》

んー、これは手を出そうかと思ってる。実際のところあのオカマがサスケの身体を乗っ取つて写輪眼を手に入れたらいよいよ手がつけられなくなる。ナルトとの戦いの後らへんにボロボロになったサスケをヒュッと捕まえて連れもどしいだろ。

まあザツとこんなところか。まあ俺が元の世界に帰れば全く関係のないことだけど確認しておくに越した事はない。

とりあえず最優先で考えるべきは九尾か。たぶんもう避けられないだろ。この事件で父さんはナルトに九尾を封印したけど死ぬんだよな。でも母さんの死因ってなんなんだ？父さんは戦つて重症を負つて死んだつてことで辻褃あうけど母さんは全く見当もつかない。少し事前調査しておく必要があるか。

「あ、アサヒくん！」

俺は自分の名前を呼ぶ声に顔を上げると向こう側に手を振ってるアヤメが見えた。俺もそれに答えるように手を振ると、アヤメは嬉しそうな顔をして走って近づいてきた。

「あのね、お父さんが少しつけ麺のレシピを変えたらしくって、アサヒくんに味見してもらいたいらしいんだ。今時間ある？」

「ああ、大丈夫だけど」

ちようどいい、あのオッサンなら歳も結構いつてるはずだし九尾について何か知ってるかもな。

「じゃあついてきて！」

俺はそんなことを考えながら、笑顔で前を歩くアヤメの後についていった。

「へい！らっしやい！よく来てくれたな。当たり前だけど今日は味見役だからタダだ！」

「ありがとうございます」

俺は準備中と書かれた看板を出している一樂の厨房の中にある椅子に座っていた。

「じゃあ今からパパッと作るから待つてくれ！」

そう言うと、オツサンは麵を茹で始めた。

「ねえアサヒくん」

横にいたアヤメが小声で話しかけてきた。

「今アサヒくんって好きな人とかいる……？」

ちようどオツサンには聞き取れないくらいの声で聞いている。まあ普通恋バナとかは親に聞かれたくないか。

「ん、別に」

俺が短く答えると、アヤメは小さな声で「そっか」と呟いた。



それよりも今は聞かなきゃいけないことがある。俺はオツサンに声をかけた。

「なあオツサン、九尾つて知ってる？」

俺が声をかけると、オツサンの手が止まった。

「知ってるんだね？」

オツサンはこつちを見ずに作業を止めたまま口を重そうに開いた。

「知ってるが、俺の口からは話せねえ」

「なんで！」

「九尾は里の歴史に深く関わる妖獣。どうしても知りたいたいなら、一番近くにいて、里を最もよく知る存在……『火影様』に聞くのが一番なんじゃないのか」

「でも……」

俺が食い下がろうとしたが、オツサンはまた作業を始めてしまった。たぶんもう聞いても答えてくれねえだろうな。父さんに聞いてみるしかないか。

俺はその後、出されたつけ麺の塩気の強さが気になったので、そのこととお礼を伝えて店をあとにした。

「父さん」

俺は目の前で大量の書類を処理している男に話しかけた。

「なんだい?」

その男はこちらに目を向けることもなく作業を続けながら答えた。ここはミナトの自室である。四代目火影に就任した際に作業部屋として新しく作ったのだ。だからこの部屋で少々雑な扱いを受けても文句を言うのは筋違いってものだが、それでも俺は一抹の寂しさを覚えた。

「九尾って知ってる?」

男の手が止まった。ゆっくりとこつちを向く。目の前の父親は今まで見たことないような顔をしていた。

「どうしたんだい急に……見れば分かると思うけど今僕はちよつと忙しいんだ」

「いや、どこにいるかだけを教え「すまない、今手が離せないからまた今度にしてくれな  
いかな？」」

言葉を上から重ねるようになって遮られた。なんでだ？なんでこんなに突き放すんだ  
？俺はただ疑問に思うことを聞いてるだけなのに。なんで？

「……もういいよわかった」

俺は目の奥の方から何かがこみあげるように熱くなるのを感じて、部屋を出た。

「(なんでだ?なぜこのタイミングなんだ?)」

ミナトは目の前に山積みになされた書類を睨みながら自問していた。先ほど息子に聞かれたことが胸の奥に引っかかっていた。

九尾とは時代の節目に現れる妖獣である。その神出鬼没さからよく天災に例えられることが多い。しかしながらミナトは知っていた。九尾はおよそ100年ほど前のはマダラの襲来の際にマダラに従えられた状態で現れ、マダラの敗北後は代々渦の国出身の女性の身体に封印している。

そもそも時代の節目に現れるというのは、九尾が現れた際にその当時の勢力が壊滅的な被害を受けた結果の話である。後から見ると時代の節目になっていくだけである。

しかし時代の節目に一番敏感なのは子どもだ。子どもは大人にわからない微妙な変化を感じ取る。火影たるものそれに気づかなければならない。

「(もうクシナは臨月だ……来週にも生まれておかしくない。このタイミングで九尾のことを聞いてくる……話がうまく出来すぎだ)」

女性の人柱力にとって出産時が一番無防備になる時であり、危険である。封印の力は弱まり、さらに出産による体力の消耗でろくに動くことができない。だから今回の出産も三代目夫婦とその直属の一部の暗部、そして相談役しか知らない。そして更に四代目

火影であるミナト自身もクシナの側につく。万全の上に万全を敷いた布陣である。でもやはり引つかかるものがある以上、独自にいくつか手を打っておいた方がいいだろう。独断は火影の権限でなんとかなるはずである。

「アサヒ……すまない……君にはまだ早い」

波風ミナトは誰にも聞こえないような声で呟いた。

## 第8話 事変

いつもと変わらない夜であった。そこにはもう出産間近でお腹を大きくした母がソファーに座っていた。父はいつも通り自室にこもって仕事をしていた。

「ねえ、いつ生まれるの？」

母に聞いた。純粹な疑問であった。胸の奥に引つかかる九尾のことはあるものの、純粹にいつ生まれるのかが気になったのだ。

「そうねえ、もう明日にも生まれてもおかしくないかもね」

母は落ち着いた口調でお腹をさすりながら言った。たまに出る妙な語尾はない。

「そんな呑気で大丈夫なの？そろそろ入院とかしなくちゃ……」

出産のことについてはよく知らない。だがもう見るからに生まれそうだ。いつ産気づいてもおかしくないんじゃないかと心配になる。

「大丈夫よ、いざとなったらミナトの術もあるしね」

確かにその通りだ。飛雷神の術なら母に衝撃をあたえることなく移動できる。全くよってきた術だ。

俺はそっかと言って父の持つ時空間忍術の本でも探そうと目を本棚に向けた瞬間、爆

発音のような、しかしそれにしては小さい音が母のいた方向から聞こえた。

「はっ。」

俺が目線を元に戻すと、そこにいたはずの母はおらず、ただ分身系の術が溶けた時特有の煙がただよっていた。

俺は一瞬呆けた後、父さんの部屋に向かって走った。

「父さん！」

半ば蹴り破る勢いでドアを開けた。しかしそこには父はおらず、作業中の書類がいくらか散らばっているだけだった。

なんだ？ どういうことだ？ わけがわからない。なぜ2人とも消えた？

「パニックるな、俺。こういう時こそ冷静に。今わかってる情報を整理して組み立てろ」

俺は深呼吸吸した。これはイタチから学んだことだ。俺は完全に予想外のことが起こるとパニックってしまうことが多いらしい。

『落ち着くためのトリガーを作った方がいい』か。全く……役に立つことを教えてくれる」

俺はそのまま今わかる事実を頭の中で整理しはじめた。





が響き渡った。

「そんなに騒ぐなえ！アサヒの時に経験してるじやろ！」

三代目火影の妻、ビワコが厳しい言葉を投げかけながらもクシナを励ます。

「でも~~~~~~~~ツツ!!!ガマンしろつていう方がムリだつてばね~~~~~~~~ツツ!!!」

泣きそうな声でクシナは答える。そしてそんな中、四代目火影であり、クシナの夫であるミナトは周囲を警戒しながらソワソワしていた。

「ミナトもなにをやっておるのかえ！もうすぐに生まれるからさっさと九尾封印の準備をせんか！」

そう言うミナトはハツとしたように我に返り、封印の術式が浮かび上がったクシナの腹に手をかざした。

「クシナ、もう少しだ。もう頭ほとんど出てるから。頑張つて」

周りの警戒は解かないが、優しい声で励ました。

「前よりは狼狽えてないみたいじゃな。ほら！もう生まれるえ！お湯を持つてこい！」

そして助手として控えていた暗部のタジがお湯を持ってきた瞬間、元気な産声が響き渡った。

「生まれた……！」

その声は誰のものだったか。ただ、終わったという安堵から自然に漏れた声であった。

「さあ、クシナ、封印にとりかかるよ」

封印を早く済ませなければ。そう思っていた。

しかし悲鳴は突然に響き渡った。

「くっ！」

ビワコが毛布にくるまれたナルトを抱きながら足でブレーキをかけるようにこちらに滑ってきた。

「誰だ！」

ミナトはビワコの飛んできた方向に叫んだ。その奥から人影は足音を立てながら近づいてくる。

「流石は三代目火影の妻といったところか……完全に不意を突いたのだがな」  
その声の主は奇妙な渦巻き模様の面を付けた男だった。

「ビワコさま。アイツはどこから？」

「わからぬ……気配もなく突然に現れた。相当の使い手であることは確かだえ。アチシも警戒していなかったら今頃あそこで倒れているタジと同じようにやられていたところだえ」

「警戒だど？俺が来ることがわかっていたのか？」

若干。ほんの少しであるが男の声に強張りが生まれた。ただそこで隙を見せないあたり、相手の力量の高さがうかがえる。

「さあな。アチシの隣にいる四代目火影にでも聞いたらどうだえ。アチシはこやつが明らかに何かに備えていたようだから警戒してただけのこと」

若干の沈黙。その後には仮面の男は言葉を発した。

「まあそんなことはどうでもいい。ここに来た目的を果たさせてもらおう」

そう言うのと男の仮面の穴から渦が発生し、忽然とその場から姿を消した。

(これは……時空間忍術！)

ミナトが敵の術を理解したとほぼ同時に、ビワコの背後の空間が歪んだ。

「そうはさせないよー！」

ナルトを抱えたビワコの身体に手を触れ、ナルトごと木の葉隠れの里まで飛雷神の術で飛ばした。しかし空間が歪んだ場所に仮面の男は現れない。

(狙いはクシナか！)

そして男がクシナの隣に現れた一瞬後に、ミナトもクシナの封印式に組み込んだ術式へと飛んだ。

「流星は四代目火影。オレのスピードについてこれるのか。だが……」

ミナトがクナイで男へと切りかかり、その切っ先は男の身体を捉えた。  
はずだった。

「一手遅い」

ミナトの攻撃はミナトの身体ごと男をすり抜けた。

(……すり抜けただ?!?)

想定外の出来事に少しだけバランスを崩す。

「九尾は預からせてもらおう」

仮面の男はクシナに手を触れ、直後、また男とクシナの周りの空間が歪んだ。

「くっ！待て！」

「ミナト——子どもたちを、お願い」

妻の言葉は途中で途切れた。

「クソッ！」

「四代目火影……お前は何も守れずに終わる……これから起こること全てを指をくわえて見ている」

男はそう言うのと、時空間忍術によってその場から姿を消した。

(くっ……一番恐れていたことが起こってしまった……クシナの術式に飛ばうとしても

飛べない。おそらくあの男の時空間内にいるからか)

相手の時空間内にいる以上、すぐにクシナを救い出すことは不可能である。時空間とは無数にあるので、その中から特定の空間を探し出すことなど広大な砂漠から金一粒探し出すようなものだ。

しかし言葉は途切れてしまったものの、妻の願いは確かに聞こえた。

——子どもたちをお願い——

もしこれで子どもたちに何かあれば、妻が帰ってきた時に顔向けができない。おそらく一生涯許してくれないだろう。クシナはそういう女だ。そういう女だからミナトは惚れた。

そうなればまずしなければならないのは先ほど木の葉へ飛ばしたピワコとナルトの安全の確認と、アサヒを探し出し安全な場所に移すことである。

ミナトはそう決めて、飛雷神の術でその場から姿を消した。

## 第9話 巨大な力を前に

「……は……木の葉の里かえ？」

ビワコはあたりを見回しながら呟いた。だき抱えているのは先ほど生まれたばかりの赤子。他ならぬ四代目火影の息子である。

先ほど、突然現れた謎の男が目の前から消えたと思つたら一瞬で自分の周囲の景色が変わった。おそらく木の葉の里であるところを見ると、あの男にナルトと自分が攻撃されることを危惧したミナトが飛雷神の術でここまで飛ばしてくれたのであろう。

(それにしても……あの男……一体何者だえ?)

あの森には何人たりともたどり着けず、しかも出産場所の周りにはミナトの進言で感知結界を含めた三重の結界まで張り巡らせていたというのに、何の気配もなくあの場所まで侵入してきた。これは異常だ。そんなことはプロフェッサーと呼ばれる我が夫、三代目火影影を持ってしても1時間はかかるであろう。

「とりあえず……この子を安全なところへ……」

そう言つてビワコは三代目火影邸へと歩き出した。いま思い当たる一番安全なところはあそこしかない。仮面の男の目的がクシナなのかナルトなのか、はたまた別の何か

なのかわからない限り、今できることはこの赤子をできるだけ安全な場所につれていくことだけだ。

そうして歩き出した瞬間、目の前にミナトが現れた。

「ビワコさま！無事でするか！」

「ああ、オヌシのおかげでなんとかな……クシナはどうしたえ」

ビワコが問うと、ミナトの表情に陰がさした。

「申し訳ありません……攫われました」

「やはり敵の目的はクシナの中の九尾だったようじゃな。早急にチームを編成して取り返しにいかなければ」

「いえ、それは待つてください」

「なぜじゃ!?事は一刻を争う!もし九尾の封印が解けてもしたら……」

「クシナに言われたんです」

碧い目がまつすぐこちらを見据えながら言う。

「子どもたちをお願いつて」

ビワコは何も言い返すことができなかった。こうなった男はもうどうやったって動かない。女の勘がそう告げていた。

「それにチームを派遣したところで瞬殺されるのが関の山でしょう。現に三代目火影の

妻であり優れた忍である貴女が奴の時空間忍術についていくことさえできていなかった。あの男に対抗できるのは僕だけです」

ミナトの言うことは最もである。たしかにミナトがいなければ自分はその場で死んでいた。この男は妻を攫われても冷静な状況分析ができる。これが彼を強者たらしめている理由の一つである。

「じゃあこの後はどうするつもりかえ？」

「とりあえず僕はナルトを僕の家まで運びます。あそこなら既に結界を張つてあるので一番安全でしょう。ビワコ様は早急に三代目にクシナのことを伝えてください。家の近くまでは僕が飛雷神で飛ばします」

「わかった。じゃあナルトは確かに引き渡す。あとは頼んだえ」

そう言つて抱いていたナルトをミナトに預けた。先ほど生まれたばかりの赤子はこの非常事態にも関わらずやすやすと寝息を立てている。

「はい！ではビワコ様、飛ばします」

そう言つてミナトは手を触れると、ビワコの目の前の景色が一瞬で反転した。



「クソッ！なんだったんだアレ！」

俺は木の葉の里を三代目火影邸に向けて走っていた。なんか家を飛び出す時に見えない壁にぶつかってたけど、手をかざして集中したらなんかすり抜けられた。なんだったんだ？

でもとりあえず父さんと母さんがいなくなった理由を知るためには、三代目の爺さんに聞くのが一番手っ取り早いと思っつてその方向へ走っている。

そして突如

爆発音が響いた

「クソツッ！今度はなん……だ……と……と……」

目の前には、一番恐れていたものがいた。

「九尾!?!」

木の葉の家々を覆うほどの巨体、朱い毛並み、九本の尾を持つ狐。俺の目の前に伝説に語られる災厄の化身がいた。

九尾は身体を仰け反らせるように天を劈く咆哮を上げると、周りの家、道路、人、見境なく壊し始めた。

それを呆然と眺めていると、人々がこちらに向かって悲鳴を上げながら走ってきた。

「なんだ!?!アレは!?!」

「とにかく逃げろ!」

「俺の家が!!!」

「待つて！まだ家に赤ちゃんが!!!」

「もう助からない！家の下敷きになったんだ！戻ったら全員お陀仏だよ!!!」

混乱する者、恐怖に怯えて逃げ惑う者、置いてきてしまった家族のことを嘆く者、様々な者がいた。

その内に、九尾は里の中心部に向かって進み始めた。

（まずい……あつちにはイタチの家がある。でも俺にアレが止められるのか？いや無理だろ。だつて父さんがナルトに命懸けで封印してやつと収まったようなやつだぞ!?他の忍たちも九尾制圧に動き出してる。大丈夫だ）

見ると、里指定のベストを着た中忍以上の忍たちが九尾の方向に向かっていくのが見えた。本来ならばアサヒも逃げなければマズイ。いつ九尾が心変わりしてこちらに来るともわからないのだから。

しかし、脚は動かなかつた。恐怖に竦んだわけではない。でも、動かなかつた。

「俺は命をかけてもコイツを守りたい」

目の奥に、イタチが優しく腕の中にいる赤子に微笑んでいる光景が浮かんできた。なぜだろうか、その微笑みはひどく懐かしいように思えて、俺の心を揺さぶった。もう一度九尾を見ると目の奥がツーンとして、脚はいつの間にかあの化け物の方へと走り始めていた。

胸がキュウツと締め付けられるようだ。アレに勝てるか？ いや無理だろうな。せめて少しでも時間を稼ぐんだ。クソが、こんなはずじゃなかったのにな。

九尾はその巨体ゆえか、歩み自体は速くなかったため、アサヒはすぐに足元へとたどり着いた。

「おいークソギツネーテメーの相手はこっちだー！」

声を張り上げる。しかし九尾は四方八方から攻撃してくる忍たちを薙ぎ払い、破壊の限りをつくすことしか考えていないようで、アサヒに気づくことはなかった。

クソ、これじゃあダメだ。九尾は忍たちの攻撃を嫌がってはいるけど全く効いてない。顔の周りを飛び回ってるハエをたたき落とすような感じだろうな。

奴をイタチの家に進ませないなら俺がすべきことは別の方向に奴の顔を向かせること。そのためには俺の今できる最大最高火力の術を奴の顔に横からぶち込むしかない。

「迷ってる暇はない、やるしかないんだ！」

——風遁・風塵の術！

俺は九尾のちようど斜め後ろから九尾の頬にあたるように術を放った。ドンという音がして、九尾がこちらを向いた。

マジか、全力の風遁で毛並みを荒らすことくらいしかできないのかよ。俺の風塵の術は大岩1個を1回で粉々にする威力だぞ？あの身体どうなってんだよ。

そんなことを考えていると、九尾がこちらに向かってきた。作戦は成功したはずなのに、俺はこの時ひどく後悔をした。

——怖い、あんなの無理だ——

九尾の殺気がこちらを向いた瞬間、それを悟ってしまった。抗いようのない大きな力。あんなの無理だ。もう逃げられない。どうしようどうしようどうしよう——

思考が回る。回る回る回る。

しかしその思考は回るばかりで答えにたどり着くことは無かった。

九尾の爪がゆっくりと迫る。極限まで圧縮された時間の中で、アサヒは父親との会話、クシナとの日々の中にこの状況から逃げる方法を探していた。

これが走馬灯だと自覚したのは、九尾の爪が自分の腹を貫いていることに気づいた後だった。

## 第10話 抵抗

三代目火影は変わり果てた里の中心で忍たちの指揮を取っていた。

数刻ほど前、妻であるビワコが息を切らして自分の書斎に飛び込んできた。

彼女は少々乱暴なところもあるものの、基本的に部屋に入る前のノックなどは欠かさない。それさえもせずに飛び込んできた、それだけで幾つも死線をくぐり抜けてきた三代目火影はクシナの出産が失敗したことを悟った。

ビワコの言っていた面の男。

情報規制、結界の術式に至るまで侵入者が出る可能性はほぼゼロにしたはず。

内部からの侵略もないだろう。出産の準備には三代目である自分自身も四代目も参加した。ほころびを見逃すはずなどない。

と、いうことは。木の葉の最高機密である結界を突破し、二代目以上と言われる四代目も凌ぐほどの時空感忍術を使い、九尾の封印が弱まるタイミングも知っていたということとは。

「うちは……マダラなのか？」

60年を生きた自分が物心ついた頃から伝説と伝えられていた忍の1人、うちはマダラ。

その人物と対等に戦ったもう1つの伝説としては、三代目の師である初代火影がいる。

初代火影は三代目が出会った中でも最強の忍だ。今でこそ自分自身はプロフェッサーと呼ばれ、里の秘伝忍術すべてを扱えるがゆえに歴代最強と呼ばれているが、初代には遠く及ばない。初代、二代目、四代目、そして自分自身……すべてを知っている自分だからこそわかる。歴代最強は初代火影千手柱間だ。あの領域はもはや忍というより神に近い。その初代と対等に渡り合ったうちはマダラ、彼ならば歴史の常識、人の常識を超えて生きている可能性は十分にありえる。

「三代目！」

部下の自分と呼ぶ声によって思考から現実へと戻された。

「アサヒ様が……！」

目の前の部下は四代目直属の暗部の1人である。その彼が声色を変えて九尾を指さ



した。

「なに!?!」

指さされた方向。巨大な狐の鋭い指先。そこに壊れた玩具のように赤い髪をした少年が貫かれ、振り回されていた。

痛い、痛い、痛い

なんでこんなに痛いのか?

誰だっけ。俺をこんなふうにしたのは。



三代目は、目の前の光景が信じられなかった。先刻まで自分でさえ動きを止められる気がしなかった化物が動きを止めたからである。

いや、動きを止めたのではなく、止められた。それも若干6歳の子どもによって。爪の先にいる少年、正確には爪に貫かれている少年から伸びるチャクラの鎖に九尾は捕らえられていた。

今だ。今しかない。そう直感し三代目は指を噛み、印を結んだ。

——口寄せの術！

「なんだ、猿飛。ありや九尾か……また面倒なところに呼び出してくれたな」

「そう言うな。お前の力が必要なのだ。とりあえず九尾が動きを止めている今のうちに里の外へ押し出したい。金剛如意を頼む」

「わかった——変化！」

そう言うのと老猿は伝説上の武器である如意棒に変化した。

「伸びよ!!!」

三代目が如意棒を持って叫ぶと同時、如意棒は1キロメートル以上の長さに伸び、九尾の腹を貫くが如く勢いで里の外へと押し出した。

武器への変化は人間でも陽動としてよく行うが、武器自体の特性——つまり切れ味

や硬さなど——を再現できる術者は多くない。ましてや伝説上の武器の性能をそのまま再現できる変化を使える者など、目の前の猿魔を含めこの世に数えるほどしかないだろう。

「さて……ここからが正念場じゃな」

九尾は里から出した。しかしここからどうするか。九尾を殺すことは限りなく不可能に近い。犠牲も多く出るだろう。それに木ノ葉隠れ唯一の尾獣を失えば各国のパワーバランスが崩れる。九尾は絶対に人柱力、または一時的な封印によって管理下におかなければならない。

九尾は未だにチャクラの鎖によって捕らえられ、もがいている。

ここで三代目は小さな、しかし重大なある異変に気づいた。しかしその異変に気づくと同時、九尾を縛っていた鎖は引きちぎられ、爪に貫かれていた少年は蹴りあげられた小石のように吹き飛ばされた。

「三代目様！」

ここで先程まで里の中心部で九尾と戦っていた忍達が追いついてきた。三代目はそ

の忍達に指示を出す。

「皆の者！九尾は大分弱っておる！大技で畳みかけるのじゃ！」

指示を出すと同時に熟練の忍達は自分の持つ最高火力の忍術の印を結び始めた、三代目は吹き飛ばされていった四代目の息子のことが気にかかるも、ここで仕留めるのが先決と判断し封印術の準備をし始めた。

瞬間、チャクラが舞い踊った。異質な黒と白のチャクラ。そのチャクラはある所まで浮遊すると、目の前の九尾の口元へと舞い戻り、凝縮されていった。

凝縮されるより数瞬早く、忍達の忍術が発動した。

劈く風

爬行する雷

侵食する炎

発動させた忍者達は、一瞬だが自分達の勝利、という言葉が脳裏をよぎった。

しかしその希望は九尾の口からチャクラの玉が射出された瞬間に脆く砕け散った。

「（俺達の忍術が……全て押し負けているのか!?!）」

自分達の最強忍術が尽くなぎ払われる。この絶望感をなんと表現したらいいか。三代目を含め、忍達は高密度のチャクラが炸裂する光に包まれた。

「なんとか、間に合いましたね」

三代目が瞑っていた目を開けると、砂煙の中、目の前には「四代目火影」と銘打たれたマントを羽織った青年がいた。

「すまぬミナトよ……どうやら実戦のカンが鈍っていたようじゃ、危ないところだった」「いえ、逆にこの程度の被害で済んでるのは奇跡的です。とりあえず今は目の前のアレを何とかしましょう」

この男は。と三代目は思った。

この男は、もう妻の命が助からないと知りながら、それでも里を守るために命を賭そうとしている。

この男を火影にしてよかった——そう思った瞬間、三代目は叫んだ。

「ミナト！」

ミナトの死角にいつの間にか謎の男が立っていた。

「お前の相手はこつちだ」

そう男の低い声が響いた瞬間、目の前の空間が捻じ曲がった。

ミナトの身体がその空間の渦に飲み込まれる寸前、ミナトの身体は一瞬で消えた。

四代目得意の飛雷神の術だ。ならばと三代目は如意棒を振りかぶり、目の前の男へと振り下ろした。

「三代目火影……流石の判断の速さだ。しかし一手遅い」

そう男は言ったが、三代目は構わず如意棒を振り下ろす。しかし来るはずの手応えがなかった。

「火影2人の相手は流石にキツイからな、お前は俺のペットと戯れているといい」

そう言って仮面の男は後ろに飛んだ。男が地面に降り立つ前に空間は捻じ曲がり、仮面の男は空間の渦に飲まれるようにして消えた。